

雑誌『被服』と『戦時の本染』 —十五年戦争下の染色事情—

西谷美乃理*・森理恵**

On the journals “Hifuku” (clothing) and “Senji no Honzome” (vegetable dyeing during war):
Textile dyeing during the fifteen years' war 1931-1945

MINORI NISHIYA* and RIE MORI**

要旨：陸軍被服本廠内の被服協会の機関誌『被服』と、上村六郎『戦時の本染』により、十五年戦争下における染色をめぐる状況を見た。その結果は次のようにまとめられる。植物染料による「本染」(草木染)の振興は、第一に、化学染料の輸入の途絶と国内染料工場の化学兵器工場への転用とによる染料不足、第二に、本土空襲による迷彩色を身につける必要性の高まり、というふたつの要因から企図された。ところが一方、「本染」は、先に民芸関係者により、化学染料にはない美をもつものとして評価しようという動きが開始されていた。これが「本染」振興の第三の要因である。その普及に当たっては、染料不足の解消と迷彩色の獲得という差し迫った目的よりも、これは日本古来の美なのである、という美的精神的側面が強調される。「本染」(草木染)は戦時下の国粋意識と結びつき、戦後にはこの第三の要因によって、支持されることとなった。

(2005年9月30日受理)

1. はじめに

1) 研究の背景と目的

本論の目的は、十五年戦争下の染色をめぐる状況を、陸軍被服本廠内の被服協会の機関誌『被服』と、上村六郎の著書『戦時の本染』より明らかにすることである。標準服・国民服など戦時下の衣服をめぐることは、横田1999、井上2001・2003などの研究があり、また、戦時下の繊維については横川2001においてくわしく研究されている。しかしながら戦時下の染色の状況についての詳細な研究はこれまでにないため、本論では、その一側面を明らかにしたいと考えた。

2) 研究方法

陸軍被服本廠内の被服協会編集発行の雑誌『被服』第一巻～第十四巻(1930～1943年)より、染色に関する記事を抜き出し、1944年発行の上村六郎著『戦時の本染』とあわせて分析、考察する。なお、本稿においては、資

料の旧仮名遣い・旧漢字は、新仮名遣い・新漢字にあらためて表記する。

2. 結果

1) 雑誌『被服』

雑誌『被服』は、陸軍被服本廠内被服協会の編集兼発行により、1930年7月～1943年11月にかけて刊行された。

被服協会は、1929年に陸軍被服本廠内に設置され、被服の「国防上の重要性」「国家経済上の重要性」「個人経済上の重要性」を認識することを設立の趣旨としている(井上2003,64)。『被服』はその機関誌である。

創刊号によると、被服協会の顧問・評議員・賛助会員・役員・委員はあわせて147人で、学校関係者・軍関係者で構成されていた。会員は創刊時点で1000人以上に上り、その後2000人以上に増えたと考えられる。

創刊号の巻末には、「第一巻第一号(年四回発行)定価金三十銭郵税金四銭」とあり、一巻が一年分に相当す

*フリーランス

Freelance

**京都府立大学人間環境学部

Faculty of Human Environment, Kyoto Prefectural University

る。四年目まで年4回の発行であったが、被服協会創立五周年を迎える五年目（1934年）以降、年6～8回と刊行数を増やしている。

創刊号編集後記に、「本書の内容を如何にすべきか」として、「十一月十一日役員会に於ける専務理事説明の趣旨に基づき、被服に関する研究資料並びに意見の発表、協会事業の報告等を中心として編集」することとし、「漫画、漫文、創作、詩歌等」の「娯楽的気分」は「一切排除した」という。また第一巻第二号の編集後記では、「余りに上品で内容がかたすぎる」や「かた苦しい論文や資料もの他に読み物として興味中心のものを入れてみてはどうか」という読者の意見に、「アメリカニズムを鵜呑みにして、流行に浮き身をやつすそらのモガやモボを相手とする被服協会ではない。被服協会は国家経済の現実に徹して、被服問題の解決をなさんとする誠に地味な事業」、「都会生活者は、男女を問わず被服費の捻出に悩まされているといっても過言ではない」と応じている。陸軍内部の組織であるので当然ともいえるが、もっぱら衣生活の軍事的経済的側面に焦点を当て、流行には関知しない編集方針であった¹⁾。

以下では、『被服』における染色に関する記事をテーマ別に分けて整理し、紹介していくこととする。なお、巻号については、たとえば第二巻第一号は「2-1」のように記す。

1) 1-1 染料工場に関する記事

染料工場に関する記事は次のとおりである。

田中長太郎（日新染布株式会社常務取締役）「綿布染色工場の過去十年間をみて」2-1

柴田保一（千住製絨所技師）「我が国の染料工場」2-1

稲畑勝太郎（日本染料製造株式会社社長）「我が国染料工場の過去、現在及将来」2-2

稲畑勝太郎 同上（二）2-3

大高愿（日本染料製造株式会社）「染料工場の国家的重要性」2-3

稲畑勝太郎「日本染料工場の振興策と支那市場の獲得」3-2

このように、第二巻から第三巻（1930～31年）にかけては、数多くの染料工場に関する記事が見られる。内容はどれもほぼ同じでまとめると以下ようになる。

かつて、欧州戦乱（第一次世界大戦）勃発のためドイツからの輸入が苦しくなり、染料の欠乏から価格の高騰に遭うが、大正4（1915）年には、数種の簡単な染料の製造に成功し、染料工場が起こった。

その後、大正4年に染料製造奨励法、大正9年に染料輸

入関税法、大正14年には日本染料株式会社のみに対する奨励法を廃止し商工省令に示す主要染料30種の製造に対し市価と製作費の差額を補助する法律、などの各種施策により、大正3年と昭和4（1929）年の生産高をくらべると数量においては75%増、価格においては43%増となっている。このように、生産高は年々著しく増加し、自給の域に進みつつある。自給自足は「化学工業の興敗に大きく関係があるが、有利の状態にある」としている。

染料工場は、「純学術上に立脚し且つ他の幾多化学工業及び特殊機械工業と有機的に関係し複雑な技術を要する」ので、国防上からは爆発物、有毒ガス等化学兵器には欠くべからざるものであり、平時においては化学染料の中核となって学理技術の進歩の源泉となるので、国家的見地から助成する、というのである。

染料工場が、著者あるいは被服協会の立場から見たとき、単に、色を染める薬品の製造だけでなく、化学の発展すなわち、化学兵器の開発という視点をもって捉えられていたことが判明する。

1) 1-2 染料に関する記事

菱山衝平（東京工業大学助教授）「染料に就いて」2-4

物体の色は、選択吸収によって生ずるものであるから、染色は、「糸布その他各種の物体に化学的もしくは物理的と化学的の両作用によって、選択吸収を起こすべき耐久的性質を付与する工程」であると定義している。

人造染料を分類するのに二通りの仕方があり、一つ目は、「1876年にウイット氏の唱導したクロモフォル説を基礎とし、化学構造上類似したものをあつめ一族にする方法」、二つ目は「他の繊維に対する性質、応用上の性質の類似したものを一括して一族に分類する方法」とであると説明する。

構造上の分類は染料の製造を研究する方面、染料製造工業に用いられ、応用上の分類は染色学染色工業の方面に応用される、とする。

今堀友市（広島市立高等女学校長）「女子の嗜好調査より見たる茶褐色」4-4

「女子の嗜好調査」として、大阪府女子師範学校の全生徒、および同校付属小学校尋常四年生以上の生徒に対し、比較的単純な普通の色として、赤、樺、黄、緑、紫、牡丹、蝦茶、茶、鼠、白、黒等を挙げ、何れを好むか、何れを嫌うかという二つの実験を行なった。

一つ目の実験は色紙を用いて上に挙げた色から相対的に色の好みを知る。二つ目の実験では、同じ被験者に、色を指定せず、主観的に好む色を書かせた。

実験の詳しい過程については省略するが、結果としては、二つの実験で挙げられた色の違いはあまりなく、紫、赤、茶は比較的好まれる色であり、牡丹、鼠、黄は比較的好まれない色であるという結果になった。

二つの実験方法が全く異なるにもかかわらず、その結

¹⁾ なお、同時期において、染色に関する流行やデザインを論じた業界誌に『染織時報』がある。これについては流行色を中心に伊藤あゆみと森が調査研究を行なった（森2005参照）。

果がほぼ一致することは、両実験の確実性を裏付けるものであるとしている。タイトルに「茶褐色」が挙がっているのは、それが国防色だからであり、著者らの意図が国防色の普及にあることがわかる。

秩父工業試験場「染色に関する試験の1, 2」8-1

一、インダンスレン染料絹糸染色廃液より回収試験 インダンスレン染料は高価であるが、絹に対する親和力が比較的少なく染色廃液中には多量の染料の残骸があり、経済的に良くないので、この廃液中から染料回収の実験を行なった。

二、セロファン紙に関する試験 「セロファン」工業の発達に伴いセロファン糸が織物地風になっているので、染色実験を行なった。

「本邦染織に関する著名な発明考案年表（明治以前）」
「外国に於ける染織著名発明年表」8-1

「本邦」については仁和～明治までの66人、外国については天正～明治までの17人の人名とその「発明考案」を表にしたものである。編者名やコメントはない。

被服協会「被服地質の熱吸収と染色の関係」8-7

被服地質の吸熱と染色色相との関係について、次の8点を指摘。

1. 織物地質は太陽の輻射熱を吸収する。
2. 地質の吸熱は原料繊維によって多少の差がある。一般に動物繊維は植物繊維に比べて吸熱度が大きい。
3. 地質の染色は吸熱に大きな関係があり、黒色系統のものは一般に熱量が多く、赤色、紫色などがこれにつき、白色及び黄色系統のものは比較的吸熱度が小さい。
4. 暗色のものは明色のものに比べて吸熱が大きい。
5. 染色濃度は吸熱に関係し、染料のパーセンテージは吸熱に比例するが、直比ではない。
6. 地質表面の状態は吸熱に影響するところ大で、同一地質においては粗面のものが平滑なものより吸熱量大である。
7. 染色による吸熱効果は動物繊維に比べて、植物繊維の方が大きい。
8. 染色地質の吸熱は厚地のものは吸熱並に降温が緩慢であるが、薄地のものはこれに反して吸熱、降温ともに迅速である。

上田りうこ（日本女子大学教授）「ス・フ織物の整理と染色に就いて」9-4

家庭で簡単にスフ織物の染色ができるようにスフに対する正しい知識を与えようとしている。スフを家庭に広めようという目的だ。ただし染料は市販品を用いている。

1)-3 本染（草木染）に関する記事

小林好太郎（南大江女子尋常高等小学校長）「古代の衣

服の色彩に就いて」3-1

古代人の表現が端的であって、喜怒哀楽の各々が他の雑念を交じえないものであり、尚かつ深刻なものであることは、幾多の文献によって察することができる、として中国と日本の古代の染色について述べる。

「支那」においては『書経』に黒土、白土、赤土、青土、黄土の五つの色土の記録がある。紫草が古くから発見されていた。このほかにタンニンによる墨染めがあった。以上のような過程を経て秦の頃までには殆ど主要なものは発見され、一通りの染色がほぼ完成されていたという。

「我が国」においては仏教伝来以前に秦人の「国体的帰化」によって染色は大いに発展していた。それ以前においては、簡単な染色が行なわれていた。仏教美術の発達とともに染色技術もだんだんと発達し、飛鳥時代から天平時代にかけては、染料又は顔料の応用が完成された。万葉集はこのような背景の中に詠み出されていて、万葉集にあらわれた衣服の色彩をあげるとおよそ数十種である、とする。

山崎斌「民芸染織とその復興に就いて—草木染月明織のことども—」3-3

民芸染織とは、機械的生産による染織に対し、一農民の自給自足を単位として、「その手に織られ、その手に染められて生産する染織」を指している。機械及び化学の万能を信じ、その絶対性、合理性を信じきっている時代に抗議している。「すべてが廃物利用にして立派に役立つ」ち、数千年の経験があり、伝統があるとして、自然を知り、祖先の辛勞を仰いで、遺産を継承することを唱える。手作りに愛情がこもるともしている。染めについては古来の手法を「私がいま「草木染」と命名」し、織りについては「農村各戸、月明の夜をも働く」の意で「月明織」と呼んでいる。

なお、現在では、「月明織」という名称はほとんど聞かれないが、「草木染」は後述するように、植物染色に対する一般的な名称となっている（高岡2005）。

第十二師団経理部「久留米緋の動向」5-1

久留米緋が衰退の一途を辿る状態にあるとして、現代人の織物選定の条件を挙げる。すなわち、一に柄・色合い、二に触感、三に価格である。久留米緋はこれらの条件にあわない織物界の落伍者であるとする。しかし、和服専用地から洋服地、事務服地、簡単服地、婦人子供服地、洋傘地、ネクタイ地などを試製し、広幅織の輸出向けとしたり、捺染を応用することで、生き返りをはかろうとする。また、久留米緋の草藍染めは紫外線吸収性があり今後も研究を重ねるとある。

横島直道（木村産業研究所）「植物染料の堅牢度」9-1

手工芸染色においては、実用上の不便よりも、美の方

がより重大な要件となる。そうすると、植物染料の方が優れている。このような植物染料を残すべく、科学的に研究するとして、堅牢度について実験したものである。日光による退色試験と、ソーダ、石鹼、硫酸、硝酸等による処理試験である。

結果は、植物染料は決して強くはないが媒染や酢酸処理によってふつうの洗濯や汗には耐えうるとしている。

美和正忠（京都高等工芸学校）「植物染料と新興繊維への応用」11-1, 同（二）11-2, 同（三）11-4, 同（四）11-8, 同（五）12-1

戦争が激しくなって、国内染料合成製造工場の一部が化学兵器製造へ転換した。そのことによる染料製造能力の減退などのため、天然染料中の植物染料を科学的に解明し、利用しようという目的で、様々な植物の分析を行っている。

以上をまとめると、次のようになる。

記事には化学染料に関するものと植物染料に関するものの両方があった。人工染料は新興工業なので、品質に改善の余地があり、これからの期待が込められていた。植物染料は、染料工場が転用され植物染料の必要性による研究と、自然の奥深い色を美しいと思い現代的な方法で残そうという二通りに分けられる。

2) 上村六郎『戦時の本染（野草染色）』1944年

本書は、1944（昭和19）年6月に、大阪夕陽丘の靖文社から刊行された。巻頭の「はしがき」は「昭和十八年夏」、巻末の「むすび」は「昭和十八年八月十日」となっている。奥書には、「定価一・六〇 特別行為税・一五 合計一・七五」、「出版会承認二九〇四九〇（五〇〇〇部）」とある。ページ数は161ページ。装丁は芹澤圭介。表紙と裏表紙は「本染」風の薄茶色無地の和紙で、扉は、タイトルと著者名・出版社、そして野草の絵を描いた藍と黄の木版画になっている。巻頭には色見本が三枚貼り付けられている。

著者の上村六郎は、後の著作集によると、1894年生まれ、京都高等工芸学校にて染色学を学び、京都帝国大学工学部工業化学教室にて染色学及び繊維学を修めた（上村1979, 奥書）。民芸に参加し、草木染の第一人者として、戦後も長く活動し、多くの著作を成した。

本書の構成は次の通りである。

はしがき

- 一 戦に勝つための染色
- 二 我が国の昔の染色
- 三 日本の染色の歴史
- 四 戦時の染色と古代の染色
- 五 本染の今昔とその実際
- 六 春の染草とその染色

七 秋の染草とその染色

八 染紙の話

九 戦時の新染色美

一〇 戦時の色名

一一 日本の染色と支那及び南洋

十二 本染のいろいろ

本書の趣旨は、戦時中の染色は昔からの日本人の方法で行なうのが一番だと主張し、その方法を広めることにある。論旨はきわめて明確であり、同じ主張が何度も繰り返される。以下、順に見ていく。

2) 一 戦時下の染色の役割

「はしがき」のなかで著者は、

戦争がだんだん激しくなってきましたと、すべてのものが、みんな戦に勝つことを目的にしなければならなくなって参ります。（3ページ）

として、戦時に相応しい染色の条件は第一に見えにくい色にすることだとしている。この見えにくい色というのは迷彩のことであり、つまり、戦時の染色は迷彩を第一の目的としている。第二に実用的な丈夫な色であり、第三に気持ちを引き締めるような色であること、また、出来上がった色だけでなく、用いる材料についても戦争に必要な材料を一瓦（グラム）も使わないようにしなければならないとしている。

そうして、過去三十年間の実験と、昔からの染色の研究結果から考えて本染による無地染の他にないという結論に至る。しかも、古来の本染といっても、昔のままの草木、木皮によるものではなく、天然にいくらでもある、野山の雑草とか、あるいは自然にできる木や草の葉を使って、各自の家庭で簡単にできるような染色のことだとする。この方法によると化学染料がいらず、たくさんの爆薬を前線に送ることができ、戦力増強に役立つというのである（4ページ）。

そしてこの後に、

一人でも多くの人が実際に本染をおやりになるよう心から望んで止みません。（中略）本染の美しさのことにつきましては、実際やってみますとすぐ分りますので、この本では一々申しませんが、不思議にそれはほんとうの美しさを持って居ります。（4～5ページ）

とあるので、戦争という状況下、仕方なしにというのはなく、本染の美しさを伝えたいという気持ちも込められていることがわかる。

「一 戦に勝つための色」のはじめに、染色→生活を正しく・美しくすること→明朗で逞しい真の建設力につながる、として非常時において、染色はなお一層の重要

性をもつとしている。染色が生活をつくるのだ。さらに、防空のための迷彩として、染色は安全を守るためになくはないとしている（9ページ）。

さらに、戦時の染色の条件として、

- ・戦争に必要な材料を消費してはならない。
- ・一つの設備も必要としない。
- ・染料の製造のために、一人の人員も必要としない。
- ・色は美しく、且つ丈夫で、仕事の上にごまかしがなく心を引き締めてくれるような色。
- ・戦時の活動服として迷彩にもなり、どこまでも実用的なもの。
- ・染料も媒染剤も容易に無限に得られるものが望ましい。

をあげており、そのような染色は戦時下ばかりでなく平時に於いても理想的であると述べている（10ページ）。

天然染料といっても昔の人が用いた草根木皮は、その採れる量に制限があるので、代わりに草や木の落ち葉、不要の小枝を用いるのが一番理想的としている（11ページ）。

女性に推賞する「つるばみ色」（紺黒色）を例にしてみると、この色は、栗の木や、樺の木や檜の木や樫の木、落ち葉、小枝、土の中に含まれる鉄分、腐鉄の錆水等を発色させて簡単に染めあげることのできる色だとして、染めるのに必要な分量を見積もっている。

すなわち、「我が国で、織物として実用する絹、毛、人絹、ス・フ等の全繊維」は一年およそ二億キログラムであり、これを「全部つるばみ色に染めるのに必要な草木の葉は十億キログラム以内」である。そして、十億貫の木炭を焼くのにその原料の木材は六十億貫、その原料としての木材からとれるところの小枝及び葉は十二億貫、十二億貫＝四十五億キログラムであるから、そのわずか四分の一か五分の一が、必要な枝葉の量だということである（12ページ）。

男性については従来の国防色の他に、材料の点からカーキ色の系統である「ふし色」を推賞していたところ、国民服の色を国防色（との茶色）一色に限らず茶褐色及び紺黒色をも認めるということに定められたとある（13ページ）。

上村自身、もとは化学染料の研究者だったが、合成染料及び染色のことを長く研究した結果、最後に行き着いたのが、この本に述べたような染色だったという（14ページ）。

「二 我が国の昔の染色」「三 日本の染色の歴史」では、戦時の本染について語る前に我が国の染料がどういうものだったのか、どのようにして化学染料万能の時代になってきたかを述べている。

このなかで、化学染料について

西洋の化学染料に依る染色というものは、染色の精

神的な意味を知らず、また本染の美しさを見分けることの出来ない、悪い目しか持たない西洋の人たちが、染色を、安価に、且大量にやって、大いに儲けようとして考え出したものであります。（41ページ）

と述べていて、化学染料や「西洋人」に対する憎しみが感じられる。

本染を推奨する理由は「九 戦時の新染色美」に、より詳しく書かれている。まず着物の染色を、すべて植物染料の浸染による無地染にするべきだとして次のように述べる。

その結果として生じますところの無地染の、本染の着物の美しさ、即ち模様をもたない、単に本染の色と色との調和にのみよる美しさこそ、今の我が国のような、如何なる困苦欠乏にも打ち勝って、聖戦を完遂し、以て有終の美を勝ち得んとする時代に於きましては、まさに選ばれたる、新しき染色美であらねばならないかと思うのであります。（97～98ページ）

その根拠は以下の5点である。

一 本染による無地染は、これを染めるのに特別な染色技術を必要としないので、従ってまた、専門家又は専門の工場の必要がなく、簡単な指導を受けることによって、誰でもが、必要に応じて、一寸した暇を見て、たやすく家庭で各自にこれを行い得ること。

二 しかもこれをやるのに、模様染に比べて手間がかからず、更にまた、型紙（日本紙）や捺染糊（食料）のような、戦時に不足しがちな材料を必要としないこと。

三 更に一番強みとするところは、よしどんな染料飢饉（化学染料のなくなること）に出会っても、生地さえあれば、これを染める材料すなわち染料は、各自が、野や山に於いて、いくらでも勝手にこれをあつめて来ることが出来ること。

四 しかも本染に依る無地染は、その色は堅牢であり、けばけばせずに質実であり、その上、本当に清楚な美しさがある、決戦下の新時代に最もふさわしいものであること。

五 本染に依る染色は、その色が、不思議にもお互によく調和するので、この点については、誰でも、少しも失敗することがないこと。（98～99ページ）

大日本婦人会では会服の色は紺黒色と定め、なるべく現在の手持ち品を利用して作り、そしてその染色は、いつか家庭染料が出回ったときに、各自が自分でこれを染めるようにという指示を行なった（100ページ）。「各自が自分で染める」との指示は、無地染が、誰にでも、家庭で簡単にできることを示しており、上村の主張と一致

している。人手や物の不足している戦時中では、着物を染めるのに、技術者を使ったり、或は工場や設備を使ったりすることは、極力これをさげなければならない。この意味で、自分の着物は自分で暇を見て染めるということは、最も時代に適したやり方であるというのである。

ただ、大日本婦人会の指示の中で、家庭染料が出回ったときに染めるようにしたいという部分には上村は反対している。この際、家庭染料の出回りなどを待っている必要がなく、野や山に満ちている天然染料を活用すべきである、戦争がいつまでも続き、色々の材料が、もっともっと不足してくることを覚悟して、将来の対策を考えなければならないというのである（101ページ）。

そして、

国民の生活を誠実にし、且健全にする事が出来る（略）染料の製造と云うことがいらなくなりますから、人手がたすかり、工場がたすかり、更にこれを製造する原料がいらなくなります。（103ページ）

と、しつこいほどに、本染の必要性を述べている。さらに、この後には次のようにある。

この化学染料の原料のことにつきましては、詳しいことを述べる訳に行きませんが、それはすべて戦争に最も必要な、爆薬や毒ガスの原料なのであります。もともと各国で染料工場に力を入れました訳は、いざ戦争と云う場合に、その原料と工場と、そしてその技術とを、すぐに戦争に必要な爆薬や毒ガスの製造に転じさせるためであったのであります。それですから、戦時に染料などを造っておられないのは、むしろ当然であります。つまり、化学染料の製造と云うものは、平時には使いみちのない、爆薬や毒ガスの原料を、その工場や技術と共に、戦争のために用意して置くための、一つの手段にすぎないものであります。従って平時に於きましては、染色はある犠牲をはらって、つまり本染に比べまして、色がよくなくとも、或は値段が高くとも、我慢して、これを使わなければならないのであります。勿論、私共染料の研究者は、その化学染料が、少しでもより美しく、より丈夫に染まり、そしてより安く出来るように、つねに研究は進めております。そのためには、植物性の染料や、或はその染め色は、私共のお手本なのであります。しかし、化学染料がもともそういう目的のものでありますから、戦争になって、それが造れなくなるのは、何も不思議なことではありません。私共は当然それをやめて、すべてをあげて、戦争の方にふり向け、もって戦力の増強をはからなければならない訳であります。そしてそれに代わるべきものが、私の云う本染なのであります。即ち、（略）本染をやりますことは、ただちに戦力増強に役立つことになるのであります。（103～104ページ）

化学染料を作ったり使ったりすることじたいが、そもそも戦争のための一手段に「すぎない」との極論には、驚かざるを得ない。

2) -2 本染の方法

「四 戦時の染色と古代の染色」と題された章では、古代の染色と戦時の染色がどのように関係しているのかということ述べている。比較的后世の染色は大抵材料が木や草の根や、樹皮であって、なかなか簡単にかつ多量に採ることは困難である。また無限にあるというものでもない。ところが、古代のように野や山に自然にできている木や草の葉を使うと、いくらでも限り無く、簡単に採ることができる（44～45ページ）。

こうして考えていたところ、『枕草子』に、白樺の葉や枝を用いて紺黒色の着物を染めたことあったことから、木の葉の染色を実用化することに目をつけ、実験した結果、戦時の染色はこれに限ると考えたという（45ページ）。

次に国防色に染めるのに一番手近な材料として玉葱の皮をあげる。玉葱は、黄染の染料として知られていたが、媒染剤に鉄分を使うと国防色（との茶色）に染まる。京都市を例にして、玉葱でどのくらいの着物が染められるかを見積もっている。

一年間に配給される京都市の玉葱の量 四十万貫
↓
玉葱の外皮をその約2%として八千貫
↓
着物一反を国防色に染めるのに
必要な玉葱の皮の量は約五十匁
↓
約十六万反の着物を染めることができる

さらに、玉葱の外皮の他にも国防色に染め得る材料がたくさんあるから染料の心配はないという（46～47ページ）。

「五 本染の今昔とその実際」では、我々日本人は古い時代から、野や山に咲き乱れる木や草の花を着物に擦りつけて植物で衣を染めることをしていた。本染のように植物性の染料を用いて染めることに、限り無き興味と愛着を感じるのは、一千何百年このかた、連綿と刻み込まれた思い出が多いからだとしている（50～51ページ）。

続いて山の草木や玉葱の皮などを使った、黄褐色、ふし色、茶色の染め方がくわしく解説される（54～57ページ）。ただし、赤色、紺色については家庭で染めるのは困難とし、その後、日本列島琉球列島各地の色々な染料を紹介する。そして結論は次のようになる。

これ等の本染の背後には、忘れんとしても忘るることの出来ませんところの、私共の祖先の生活が、色美

しくおっているのです。今その本染が、国の運命をかけての大戦に、再び私共の間に生きてかえってきますことは、誠に不思議な因縁と、云わなければなりません。(62ページ)

「六 春の染草とその染色」と「七 秋の染草とその染色」では、春や秋は自然と人間との親しいつながりを一番強く感じさせてくれる時だとして、それぞれの季節における本染の方法を紹介する。七章には次のようにある。

どんな風にして染められたものであるのかを知らず、ただ単に、それがいくらの値段であるかと云うことしか知らないような、こんなうわべの生活をしていることは、決して正しい生き方ではあるまい(中略)殊に今の時代には、戦時体制を強化する必要から、これまでのように、化学染料がふんだんに製造されなくなって来ていますから、この必要を、特に深く感ずる次第であります。(75～76ページ)

そして、もっと自ら野に出て色々な色を探そう、と呼びかけている。

「十 戦時日本の色名」ではさらに、戦時の本染について、それは、自然にかえることであり、神武の古への復興につながると論理が展開される。そして、色の名前を、日本の本来のものにかえせとの主張にいたる(109～110ページ)。日本は色彩の国で日本人の目は欧米人の目と違い、色合いを細かく区別するのに向いている。日本人達が、色を愛し、色に対する教養が深かったからだというのである(110～111ページ)。

我が国は色彩の国であり、その色の名なども、世界に比を見ない程の、進んだ、しかも美しいものであったのでありますが、一度近世の欧米式の色名が輸入されますと、人々は、いつしか日本の本来の色名を忘れて、こぞって欧米式に変わって行ったのであります。それと同時に、色の区別なども、全く欧米式に、実に粗雑になってまいりました。(略)これでは、折角色に対して進んだ文化を残してくれました祖先に対して、甚だもって相すまぬ話であると思われるのであります。(114ページ)

上記を受けて「十一 日本の染色と支那および南洋」では、各民族間の染色文化の関係は、あるものは独立に発達し、またあるものは関係して発達してきたので、これらのことを明らかにするには、まず、一つ一つの民族について、その染色文化を明らかにし、その後、お互いとの関係を見出すことが必要になると述べている。

「十二 本染の色々」は最後に、様々な植物の本染による方法を見やすくするために簡条書きにまとめている。

以上が『戦時の本染』のおよその内容である²⁾。

3. 考 察

1) 染料工場の転用と国防色

第一次世界大戦中から染料工場を増やすことが推進された。それは、当時世界の染料の大半を輸出していたドイツが染料工場を火薬、爆薬、毒ガスなどに動員したので、染料不足を招いたからだだった。加えて、染料工場の工程が化学兵器をつくる過程と似ているため、戦時において緊急事態に転用できる、また平時においては、様々な化学製品や薬品の、化学工業の学理技術向上にあてることができる、という理由で染料工業が国家的に進められた。

しかし、戦争が進むにつれ、染料工場は当初の目的通り化学兵器をつくる工場へと姿を変え、物資の節約などから次第に天然の染料を使うことが推奨された。それが、本染(草木染)の振興のきっかけとなり、戦後には一部の愛好家に受け継がれ工芸の一分野になった。

『被服』には、合成染料と植物染料の二通りの記事があった。合成染料は安価で大量に生産できるため希望の星だったのではないだろうか。しかし、染料工場は軍用に転用されてしまう。植物染料は、化学染料の穴を埋める必要と、植物染料の美しさを現代にも残したい、そのため現代的な方法で研究したいというふたつの動機が得られた。戦争によって幅広い人が科学的に物事を考えるようになった時代でもあったのではないか。

戦時の染色の特徴は、防衛のため特定の色が推奨されたことである。戦争が進むにつれて女学生のほとんどが国防色と思しきものを着用していた。茶褐色が「国防色」と名付けられ、そのまま国民服に転用された。「国防色」というのはいわゆるカーキだが、きっちり決まった色ではなく、比較的幅の広い色であり、明確な定義は最後までなかった。そのいい加減さがかえって、「国防色」の普及に大きく貢献したとされる(井上2001,65)。

つるばみ色などの暗い色は、昔は身分の低い者の色だった。また、古来の草木染の原料は自然からとれるものに違いないが量が限られている。戦時の染色の目的は、とにかく誰でも簡単に迷彩を得ることであつたし、昔のように色彩で身分が決まる時代でもなかったから、材料に限りがないカーキやつるばみ色やふし色がよいとされた。この点で、本染は植物を材料にするものであるとはいえ、古来のありかたとは大きく異なるのである³⁾。

²⁾ なお、1945年12月には、ほぼ同内容で『野草の染色』が出版されている。「昭和二十年八月」の「はしがき」によると、「この小著は前に刊行しました『戦時の本染』の再版であります。戦が既に終了したので、題を改め、また本文の方も戦時と云う言葉を非常時と改めて上梓することにいたしました」ということである。このことについては、青木2003に言及がある。

³⁾ この意味では、上村六郎の「本染」も山崎斌の「草木染」も「復興」というのは当たらない。

2) 草木染の「復興」

ところで、植物染料による染料を現在では一般に「草木染」と呼んでいるが、これは『被服』の記事でも見たように、山崎斌が命名したものである（高岡2005）。上村六郎、柳宗悦、パーナード・リーチ等は、古くから行なわれていた本来の染色という意味で「本染（ほんぞめ）」と呼んでいた。

上村は、1966年の著書『日本の草木染』の第三章「草木染の復興について」に、戦時下の回想を綴っている。それによると、当初、天然染料の研究を始めたのは、日本の昔の色名などを、化学の知識を応用して新しく、化学的に究明したいと考えたからであり、草木染を「復興」しようという計画はなかったという。そのように始まった研究であるため、天然の染料とか天然の顔料とか、その染色とか色、色彩に関する、技術的もしくは文化史的な研究であった。草木染の「復興」に本格的に乗り出したのは、1930年以降、柳宗悦に頼まれて、丹波布の調査研究を始めるとともに、上鴨（民芸）協団の染色の指導をすることになったからとある。その頃の日本は、藍染めだけはまだ盛んにやっていたが、それも実は年々衰えていたし、それ以外の久米島紬や紅型、黄八丈などにおいては忘れ去られる寸前だった。そんななかで柳と上村は、草木染を復活させる計画をたて、当時の日本民芸協会の機関誌「工芸」を足場とし、1931年以降、奮闘したという（上村1966,30~33）。

しかし、この提唱はいっこうに成果を納めるものではなかった。著書その他、機会のあるごとに新聞や雑誌に書くと同時に、講習や講演会もやり、ラジオも盛んに利用して、あらゆる努力を払って本染のことを世に広めようとした。そのときに「支那事変」が起こったのだという。

戦争の始めの頃は、染色などというものは極めて冷遇され、全く軍の問題とはならなかったのであるが、空襲が烈しくなると、前線といわず、銃後といわず、とにかく体を敵に見えにくくするための迷彩の必要が高まって来て、再び染色のことが問題になって来たのである。しかし染料の製造はすでに爆薬やその他のものの製造に切り替えられており、今更全くどうにもならないので、私が急に軍に呼び出されて、日本の全染色を草木染でやる計画を立てさせられた訳である。（同,33~34）

上村は、この染色を実行するために、一方では軍需工場を廻ってこれを指導し、また一方では時間の許す限り日本の各地を廻って「一生懸命に指導の目的の講習会を開いた」（同,34）。著作集にも同様の回想があり、「私は軍の囑託となり、そのことに関する実際の方法の普及と指導とに当たるよう命令され、その必要上、いろいろと調査研究を続けて行った結果、『民族と染色文化』なる拙著が現れてきた」という⁴⁾（上村1979,474）。『戦時

の本染』は『民族と染色文化』のダイジェスト版、あるいは実用編といった性格の小冊子であり、おそらくは、各地の講習会などでもちいられたものと思われる。

『日本の草木染』には、「これは実に大々的な草木染の復興である。尤も、そのことは長くは続かなかった。日本が戦に敗れたからである」（34ページ）とあるが、1945年12月の再版（『野草の染色』の刊行、注2参照）は、上村が、敗戦直後にもなお、「復興」をあきらめてはいなかったことをうかがわせる。

その後、草木染は、民芸をはじめとする趣味的な分野で一定の需要を得、「大々的」ではないが、ある程度の「復興」を果たすこととなった。

4. おわりに

以上、陸軍被服本廠内被服協会の機関誌『被服』と、上村六郎『戦時の本染』により、十五年戦争下における染色をめぐる状況を見た。その結果は次のようにまとめられる。

まず第一に、第一次世界大戦時にドイツからの化学染料の輸入がとだえ、染料不足が生じたため、まず輸入染料の不足が懸念された。この対策には国内染料工場の振興が打ち出されたが、その際、染料工場の振興施策を講ずることの理由あるいは名目に、染料工場は化学兵器工場に転用できる、といったことがあった。しかしやがて、それは仮定から現実が変わり、染料不足は深刻な問題となった。

そして第二に、本土空襲により、一般人にも「迷彩色」が必要とされるようになった。

化学染料の不足と迷彩色の必要という、ふたつの問題を一挙に解決するものが「本染」（草木染）であった。

ただし「本染」（草木染）は、民芸関係者により、化学染料にはない美をもつものとして評価しようという動きがすでにあつた。ここに「本染」（草木染）振興の第三の契機があつたのである。「本染」（草木染）の普及に当たっては、染料不足の解消と迷彩色の獲得という差し迫った目的と同時に、これは日本古来の美なのである、という美的精神的側面が強調される。「本染」（草木染）は戦時下の国粹意識と見事に結びついたのである。

化学染料の発明以前には、世界各地で植物染料による染めが行なわれていたことは自明であるのに、敵国＝化学染料＝美しくない、日本＝本染＝美、といった図式ができあがってしまっているのは滑稽ですらある。植物にもとづく多くの色名が存在したことがすなわち、複雑な

⁴⁾ ただし、東京高等工芸学校教授、陸軍被服本廠囑託の宮下孝雄が1943年に著わした『迷彩と偽装』では、迷彩・偽装の必要性と国防色の重要性が論じられているが、「国防色使用染料」として挙げられているのはすべて化学染料であり、植物染料は一顧だにされていない（宮下1943, 197~231）。

色の識別能力があったことの証明にはならない⁵⁾、そもそも、そのような、いわば贅沢な染色文化を享受していたのは、かつて日本列島に居住していた人間のうちの、いったい何パーセントだというのだろうか。

おそらくもっとも重要なことは、この、「本染」(草木染) 振興の第三の要因だけが戦後も残り続け、今も支持されていることである。迷彩色の必要という第二の要因は敗戦後すぐになくなった。化学染料の不足という第一の要因も、「経済復興」の中でしだいに消滅していった。しかし、第三の要因はいまなお健在で、「本染」(草木染)を支えている。

戦時下に生み出された、「日本の色(だけ)」が、あるいは「日本人の美意識(だけ)」が優れているというような、何の根拠もない排他的な言説が、その後も無責任に繰り返されたことの結果を、いまこそ、くわしく検証してみる必要があるだろう。

引用・参考文献

- 青木茂2003「新・旧刊案内」『一寸』15号
 井上雅人2001『洋服と日本人』廣済堂出版
 ——— 2003「総動員体制下の衣服政策と風俗」『生活学 衣と風俗の一〇〇年』ドメス出版
 上村六郎1944『戦時の本染(野草染色)』靖文社
 ——— 1945『野草の染色』大八洲出版株式会社
 ——— 1966『日本の草木染』京都書院
 ——— 1979『上村六郎染色著作集一』思文閣出版
 高岡妙子2005「『草木染』の名付け親 山崎斌の自然染織復興」『染織a』296号
 宮下孝雄1943『迷彩と偽装』成武堂
 森理恵2005「雑誌『染織時報』にみる流行色—大正二年～昭和八年—」『風俗史学』30号
 横田尚美1999「戦中ファッション再考」『ファッション環境』vol.9 no.2
 横川公子2003「人絹とミシン」『生活学 衣と風俗の一〇〇年』ドメス出版

⁵ たとえば、昭和初期の、和服に関する色名の多さは驚嘆に値する(森2005参照)。しかし、それらを識別できたのは、舟橋聖一の小説『悉皆屋康吉』ではないが、一部の専門業者だけであろう。